

英文著作『茶の本』(2006)出版から満百年を超えて、天心・岡倉覚三を再評価しようとする機運が熟してきた。なかでもルストム・バルーチャの近著『もうひとつのアジア』は注目に値する。そもそも大英帝国の植民地支配下にあったインドには、自分たちがアジアの一員であるとの意識は存在しなかった。そのインドにアジア意識を覚醒させたのが、ほかならぬ岡倉だった、という。岡倉最初のインド滞在(1901-2)中に成稿をみた『東洋の理想』冒頭の「アジアはひとつ」。この宣言に共振したベンガル出身の詩人に、ロビンドロナート・タゴールがある。だがバルーチャは両者に相似ではなく違いを見る。「ひとつのアジア」と「もうひとつのアジア」との裂け目。その思想的対話は、岡倉の死後、タゴールのノーベル文学賞受賞後に深まった。そこに、著者は着目する。

その岡倉がインド滞在中に執筆した英語草稿「吾らはひとつ」は、岡倉の没後、遺族により発見され、1939年に『東洋の覚醒』として和訳出版される。バルーチャはその内容を検討し、そこには『東洋の理想』の校訂者であったシスター・ニヴェディタが、腹話術さながらに岡倉を通して自説を代弁しているとの見解を示す。だがこれには全面的には承服しがたい。ふたりの原稿を時系列で復元するかぎり、両者には切磋琢磨の相互依存が見えるからだ。たとえば弥勒菩薩は自らの解脱を犠牲にして衆生の救済のために回帰したとい

不動から風土へ——インドからみた岡倉覚三

ルストム・バルーチャの近著に触れて

連載97

国語・日本文学文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教員 稀賀繁美

う。この慈悲に関する教訓などは、シスター・ニヴェディタが、自ら下読みした岡倉の原稿から汲み取った有様の痕跡が復元できる。

この『東洋の覚醒』の英語原稿5章冒頭で、岡倉はオーム(オム)のマントラを唱える。インドは「仮借なき慈悲の女神」カーリーへの祈禱においてオムを讃える。ここには1901年に『母なるカーリー』を出版していたシスター・ニヴェディタからの感化が明らかだ、と私は考えている。岡倉は、同じオムが日本では「不動」に仮託されていると述べている。バルーチャは「不動」fudôと「風土」fûdoとを混同したらしく、ここから岡倉と和辻哲郎の『風土』とを繋ぐ文化論の系譜を想定する。語学的には明らかな誤読だが、この混同は読者の想像力を刺激する。なぜなら不動はサンスクリットのアチャラ achala に由来し、シヴァ神の別称であり、シヴァ神はインドのモンスーンの暴風雨を人格化したものともされるからだ。

インド洋経由の欧州への船旅から生まれた和社のモンスーン文化論は、台風による予測不能な天災が文化環境に与えた影響を重視していた。その根底には、岡倉がベンガルで見聞したサイクロンの光景も重ね写しとなるだろうか。くわえてシヴァを踏み敷く漆黒の女神カーリーは「不吉な雨雲のように暗黒」とも形容される。雷鳴とはカーリーの哄笑に他ならない。シスター・ニヴェディタはそう述べている。岡倉はそれを「雲のうへの囁い」と詩的に敷衍してみせたようだ。

去る10月3日に惜しくも急逝された若桑みどり氏は、2002年にインドで行なった岡倉天心に関する英語講演で、シスター・ニヴェディタが帰依したヴィヴェカーノンダの師たるラーマクリシュナの性転換に注目しつつ、カーリー信仰と、創造の根底をなす暗黒との関係といった問題にも触れておられたようだ。バルーチャとも親しい小泉晋弥氏も、天心の五浦での漁師姿が、中国漢代の嚴子陵の姿に自らを託したコスチューム・プレイであったことを図像的に検証し、岡倉の変身願望を解き明かしている。晩年の岡倉がインドの女流詩人ブリアンバダ・デーヴィに献呈したオペラ台本「白狐」には、九鬼隆一夫人初子との関係が昇華されたのみならず、ヒトに恩返しをする雌狐のうちに、岡倉が自らの境涯を託した変身譚の形跡も認められる。岡倉における母性転換願望と異性への憧憬——そうした話題についてバルーチャ氏を囲んで若桑氏と鼎談する機会には、無念にも、ついに恵まれなかった。若桑先生の未刊英文ご遺稿の刊行を祈りつつ、バルーチャ氏の新著の紹介に代えさせていただきます。

Rustom Bharucha, *Another Asia*, Rabindranath Tagore and Okakura Tenshin, Oxford University Press, 2006. なお岡倉覚三原作「The White Fox」オペラ版は、戸口純作曲・大石泰演出により12月8日、旧東京音楽大学奏楽堂(上野公園内)にて英語により初演の予定。

2007
12.15
No.
2850